

## 新島襄先生墓碑再建の経緯について

遠藤 彰

一八九〇年一月二三日新島先生は天に還られたが、翌年勝海舟の揮毫を刻んだ鞍馬石（花崗岩）の墓碑が八重子夫人の手によって、若王子山頂に建てられた。いらいこの地域は、同志社の墓域として同志社ゆかりの方々の墓碑が先生をとり囲むように次々に建てられ代々の同志社教職員、学生生徒、卒業生にとつては、大切な精神的ふるさとの意味を持つ場所であった。

しかし、百年近い年月風雪のもとに立ち続けてきた先生の墓石は、近來剝離やクラックが目立ち老化劣化の著しさが指摘されるようになっていた。故上野直藏総長のもとに「墓石委員会」が設置され、同志社大学校地学術調査委員会主任鈴木重治氏の手になる『新島

襄之墓の保存対策の検討』（一九八一年七月一四日付）に基く討議が開始された。この文書はきわめて有効適切な進言を含んだもので、「委員会」も新墓石の選定まで協議したのであったが、上野総長の永眠によって沙汰やみとなった。この「委員会」の検討が何らかの実を結ぶにいたっていたら、と惜しまれる。（鈴木重治『旧新島襄墓碑の劣化・損壊と保存修理』、「新島研究」第七〇号、一九八七年五月）。

一九八六年七月七日夜より八日朝にかけて、大学大成寮は同寮寮委員会・校祖墓参実行委員会の企画指導による「校祖墓参」を行った。その時一人の参加者が先生の墓石に抱きついたため、石が倒れ、墓石は無残な損壊

を蒙った。九日墓域を訪れた法人本部岡部洋庶務係長によってこの状況が発見され、瞬く間に悲報は全同志社に広がった。同日調査に赴いた鈴木重治氏は、損壊状況をつぎのように記していられる。

「墓碑の頭部が大きく三つに割れ、更に傘大の破片や親指大の破片は、六十片以上もある。また、墓石の裏に二本の丸太がある。一本は生木、他の一本は焼けた丸太。後に倒れた墓碑を、丸太をテコにして引き起したらしく、つまり勝安房の追悼文の刻まれた面の中央部の左側には、生々しい焼けばっくいにとみられる炭化物が附着している。倒れた墓碑を、よくぞ元の位置に戻したものだ。一人、二人の作業でできるものではない。ジョセフ・ハーディ・ニイジマとローマ字で刻んだ台石の右上に、若干の墓石の破片が集められていた。新島の新しい部分分は、落ちて割れたものが、積み石ごっこでもしたように、あやふやではあるが慎重に積み上げられており、破損後の人為的な作業がうかがえた」（同氏、前掲文）。

同日、大成寮の右記画委員会は、六月九日この事故を大学学生部に報告し、十二日左

記の『謝罪文』を今出川校地に貼り出した。

## 謝罪文

去る六月七日夜から八日にかけて『校祖墓参』という大成寮の行事を行いました。

『校祖墓参』は年に一度寮内の交流を図ると共に寮外にも広く呼びかけ、全学的な交流を図る目的で行われてきたものです。

当日、午後十一時に寮を出発し、終着点である若王子山頂の空地には八日午前二時過ぎに到着しました。そしてその場で夜け明まで参加者一同で交流会をもちました。ところが午前三時ごろ墓に近づいていった参加者のうち一名が墓石を抱きつくような形によりそのはずみで墓石を後方に倒してしまい、墓石上部を壊してしまふという事が起こりました。

言うまでもなく、墓石を壊すという事は私達の行事の主旨ではありません。しかし偶発的であったとはいえ、未然に防げなかった事は私達の重大な過失であったと深く反省しております。

またこのことが多くの人々に大きな衝撃を与え、動揺をもたらした事を真摯に受けとめ全学並びに同志社関係者に謝罪すると

ともに今後大学との話し合いを通してできるだけ限りの責任をとっていきたくと考えます。

一九八六年六月一二日

大成寮寮委員会校祖墓参実行委

(原文のまま)

各種報道機関は、この「事件」を連日大きく報道し続けた。なかには、かなり興味半分の推測に基く記事もみられた(当時の新聞報道の記録は「新島研究」第七〇号に収録されている)。学内では多種にわたる意見が噴出し、また校友や一般市民からの批判や非難の言葉も多く寄せられた。同志社教育の現状に対する憂慮や建設的な忠告から、大学および学生部の「寮対策」の手ぬるさへの批判やさらに厳しい「処置」への勧告など多岐にわたった。

六月一日、松山義則総長の『新島襄先生墓碑の破損について』という所感が、「同志社社報」号外によって全教職員に公示された。墓碑の破損を遺憾とし、この事態を同志社教育の現状への深刻な「問い」と受けとめ、「同志社教育の真正の再生」を訴え、墓碑の修復については「新島襄之墓保存修理委員会」(委

員長松山義則理事長)の検討に委ねたい、という主旨のものであった。

六月三日、小野高治学生部長(当時)が、『新島襄先生墓碑破損について』という声明を「同志社大学広報」(臨時二六七)において発表された。内容は、今回の事態を遺憾としつつ、大成寮委員会・校祖墓参実行委員会よりの報告に基く事情聴取の結果を述べ、かつ「謝罪文」公表をはじめとする寮面委員会の態度の「真摯」さを評価し、「今後の自覚ある行動」への期待を表明したものであった。

学校法人同志社理事会(六月以降)は、慎重な検討の結果、総長と学生部長の声明の線に副って大学の指導を信頼することとし、墓碑については理事長の諮問に対する「校地学術調査委員会」(委員長原正大学長、大学考古学研究室(代表森浩一教授)の調査に基く回答と「新島襄之墓保存修理委員会」の議を尊重し、破損墓碑は考古学研究室において現代最高の石造文化材修復技術による修復を施した上、同志社内の適切な場所に保存し、若王子墓地には新しい墓碑を建立すること、なお石材は新島先生ゆかりの米國ヴァーモント州産の花崗岩を求めることを、八月最終的に

決定した。この交渉には、理事オーテス・ケリー教授が同州ラットランド市のグレース合同教会デーン牧師を通して当り、同牧師の尽力により墓碑として最適の美しく堅牢な石材の入手が可能となった。旧墓碑は修復完了後、九月田辺校地の大学考古学第一資料室に搬入され、周到な観察下におかれている。見学も可能である。

なお、旧墓碑の破損状況や復元修理のもとうについては、鈴木重治氏によりつぎの諸文献によって詳細に報告されている。同氏前掲文のほか、『新島墓碑の現状と修復について』、『同志社時報』第八一号、一九八六年、『旧新島墓碑の修復・強化と保存』、『同志社時報』第八三号、一九八七年、『破損した旧新島墓碑の復元・修理完成』、『新島研究』第七一号、一九八七年など。

新墓碑の石材は一〇月到着、株式会社沢吉の手によって製作建設され、一九八七年一月一六日、学校法人同志社による「新島襄先生墓碑再建除幕式」が、新島家から新島得夫氏と公一氏の列席をえて挙行された（『同志社時報』第八二号所載）。旧墓碑の勝海舟による碑銘はそのまま新墓碑に移し刻まれた。一



月二三日の先生永眠記念日全学園早天祈禱会は、新しい墓碑を前にして行われた。

これに先だって、大学の教職員の有志の間で、今回の「事故」を大学の教育責任として捉え、とくにキリスト教主義に基づく精神性の低下によるものと受けとめ、同志社の精神的覚醒を共に祈り語り合おうとする小さな人の輪ができ、やがて大学をこえて同志社内諸学校に広がっていった。大学各学部からの十数名、女子大学および諸校からの数名を中心とする教職員で、この交わりの中から、講演、奨励、文筆などを通してのこの趣旨によるアピールが行われ、また新墓碑建設のための募金活動が展開された。（これらの講演や文章と募金のアピール文および発起人氏名は、『新島研究』第七〇号に収録されている）。な

お、この募金は一九八七年三月末で終了、総額二、六六二、九三〇円が、法人に指定寄付として手交された。この募金には、大成寮寮生一同からの拠金も寄せられており、大学寮職員会の協力もあつた。さらに、校友、市民の応募もあり、また新島学園の教職員、学生生徒からの拠金も送られてきた。

原正大学長は、その『よみがえれ同志社の良心』という一文において、大学の教学の責任者として「不祥事」を詫び、「墓碑を破損させた学生が、きつと学生部長か私に名乗り出てくれるものと念願しておりましたが、今もって申し出がありません」と嘆き、今回のことを「同志社のキリスト教主義に基づく人格教育の現状に対する警鐘ととらえて」、「今後、教育の現場の中で苦悩に満ちた十字架を背負っていかねなければならないと心に決めております」と述べておられる（『新島研究』前掲号）。墓石を倒壊させた学生が堂々と名乗り出ることを、小野学生部長もまた願っておられた（『痛憤を超えて敢えて寮生を信頼する』、『新島研究』前掲号）。「彼がいつまでもこの重荷を負うて人生を送ることは新島先生の志に反するものであります」と。筆者も

この点同意見である。

多くの同志社人にとって長く心の支えであった旧墓碑は、不幸な事故によって破損を蒙ったが、幸いにも復元されて保存されることとなった。新しい墓碑がヴァーモント花崗岩の石材を得て完成され、若王子山上に簡素かつ美麗な姿を現した。この墓碑は、これからの百年二百年、同志社の精神的指標となることであろう。この稀有ともいふべき痛恨事へのり越えて、新墓碑建設を達成された関係者の方々の努力に、敬意を表したい。

キリスト教的良心は、絶対なる超越者の前に常に襟を正す。世間的常識、社会的規律、集団的利害を超え、権力やイデオロギーのあらゆる力や価値から根源的に自由である。この自由を「手腕に運用」しうる人間の育成・教育こそが、新島先生の、そして同志社の教育の基本とするところであった。大成寮の「校祖墓参」が、飲酒を伴った結果、墓碑の損壊につながったとするなら、大成寮の両委員会の『謝罪文』はそのことを明記すべきであったし、当の「参加者の一名」は何らかの方法で責任を明らかにすべきであったと思われる。小野教授の言われたごとく、これを

当事者一生の重荷とするのでなく、適当な時点においてこれを実行することをせつに望みたい。同時に、事故のあと、大成寮生が数回にわたって墓域の清掃を自発的に実行し、また右に述べた募金に参加してくれたことは、募金責任者として嬉しいことであった。さらに、「今後大学との話し合いを通してでき得る限りの責任をとっていきたいと考えます」という『謝罪文』の表明が、一層の具体化をみるよう願いたい。

墓碑損壊事故のあとの秋、一月二九日の恒例の同志社創立記念日早天墓前祈禱会に参加した香里高校の一生徒が、「新島先生の墓」という一文を草した。「行事は昨年来たときと何一つとして変わっていない。だが何となく違和感がただよっていた。その原因、誰も口にはしなかったが誰もがわかっていたその原因は、新島先生の墓がなかったことであつた。そして大学生と同志社の教育への手厳しい批判を展開し、「新島先生の見えない墓格とかいふものを考えていかねばならないのではないか、と思った」と結んでいる。(新井浩『新島先生の墓』、「新島研究」第七〇号)。

新島先生は、一八八四年スイスのザンクト・ゴットハルト峠を登はん中、激烈な心臓発作に襲われて、死を覚悟し遺書をしたため、生も死も一切をあげて「天の父の御手のなかにゆだね」られた。「生きるにも死ぬるにも、私はキリストの為に生き、死ななくてはならない」と。この点こそが、先生の良心的人格教育の基礎であり、また『同志社大学設立の旨意』に表明された教育理念の宗教的基盤であった。(遠藤彰『新島先生の墓碑再建の意味を考える』、「新島研究」第七〇号、『新島の思想・行動の根底』、同『月刊チャペル・アワー』第一一九号、同志社大学宗教部一九八四年参照)。右の香里高校生の所論は見事にこのポイントをついている。同志社は、この事故によって教職員も学生生徒もすべて、それぞれ立つべき精神的教育的基礎への反省を迫られた。新しい墓碑は、われわれの今後の行動と思念のすべてを見守るであろう。われわれは、つねにその前に立つことによつて同志社のもつて立つべきところを明らかに示されねばならないであろう。

(大学神学部教授)

# 吾が回想の同志社

佐藤嘉悦

私が岩手県立盛岡中学校を経て、同志社大学予科へ入学したのは、一九三四年（昭和九年）四月のこと、既に五十四年の昔のことになってしまいました。

当時盛岡中学校に中井汲泉という図画の先生がおられました。

中井先生は京都のご出身で、同志社普通学校から京都市立絵画専門学校を卒業なされた画家でした。

この中井先生は、盛岡中学校から図画教師の話があったとき、京都から遠過ぎることなどの理由から、どうしようか迷っていたところ、使者の「雪景色もまたよござんすよ」という一語で、盛岡へ赴任を決心してしまっ

たという根っからの芸術家でした。

すらりと背の高い先生は和服に袴姿のよく似合う方でした。

先生は実に気立てのやさしい方で、駑蕩として大人の風格が備わっていました。

先生の作品は「同志社歳時記」に「観音像」、「続・歳時記」に「論所法然」が挿画として載っていますが、これを見てもお分りのように、洒脱というか俗気がなく、さっぱりとした絵で、先生の人柄をしのぶことが出来ます。

こういう人柄でしたので先生は学校の内外ともに大そう敬愛されていました。

或るとき、英語の先生が「同志社には英語

のカレッジ・ソングがある」と、話しました。

みんなが、歌って下さいとせがみましたが、自分は同志社でないので駄目だ、中井先生は同志社だから、中井先生に頼みなさいとこのことでありました。

このとき、初めて中井先生が同志社に学ばれたことを知りました。

あとで、中井先生にカレッジ・ソングをお願いしたのですが、笑っただけで歌って下さいませんでした。また、同志社の話もあまりなさらなかったのですが、私は中井先生を通じて同志社を知ったものと考えています。そして同志社へ入学してしまっただ次第です。

また、私の本家の当主は熱心な仏教信者でありましたが、私が同志社へ入学のことを恐る恐る申しましたところ、「同志社ならよい、新島襄の学校だから」といってくれました。私は喜んだり驚いたりしてしまいました。

そして私は、新島先生は仏教信者から尊敬されるほどだから偉い先生だなあとつくづく思いました。

中井先生は戦争中の一九四三年（昭和十八年）盛岡中学校を退職、一九五六年（昭和三十

十一年)まで盛岡で絵や染絵の制作活動を続け、一九五七年(昭和三十三年)京都へ引き上げられました。

退職後の中井先生は、盛岡の文化関係の人々との交流はいよいよ深まり、先生の出番がなにかと多かつたようであります。これもお人柄によるもの考えます。

京都に帰られた先生は「茶房わびすけ」を経営に当っておられました。一九六八年(昭和四十三年)亡くなりました。

わびすけは烏丸通りの西側、彰栄館の向い側あたりだったと思います。一度伺ったのですが、先生は留守でした。

奥州の奥から出て参りました私にとって、初めて接した同志社キャンパスはまるで夢のようでした。彰栄館・チャペル・ハリス理化学館・神学館(クラーク記念館)・有終館など、明治初期の歴史的レンガ造りの建物がいちかを並べた風景はきわめて印象的でありました。

こんなムード豊かな学園に学ぶことの出来ることを、この上なくありがたく思い、仕合わせに思いました。

建物の定礎のしきたりも、あのレンガ造り

の建物の定礎を見て初めて知り、建築年代がはっきりしている方法だと秘かに思いました。

同志社では、その後の建築にも伝統的なあの赤レンガ造りとマッチするように心がけて来ているようですが、田辺校地でもその点が配慮されている由で、まことに結構なことだと思っております。

予科のとき、チャペルの礼拝には週に一回出席したかと思えます。入口で学生主事の徳武先生が出席者の名刺を受けておられました。

チャペルは美しい建物です。飾り気のない美しさと思っております。内部も、西洋式の小屋組というのでしょうか、構造が変っていて珍らしいと思つたものです。

このチャペルで、堀貞一先生から新島先生のお話を随分聞きました。有名な「自責の杖」も、拝見したのはここだと思つています。百歳を超えるチャペルですので、現在「昭和の大修理」が行われている由、若返つてどうかいつまでもあの美しさを残して貰いたいものです。

彰栄館は「彰栄館の鐘」として鐘も有名で

すが、京都最古のレンガ造りの建物といわれ、チャペル・有終館・ハリス理化学館・神学館(クラーク記念館)と共に国の重要文化財に指定されているのもっともなことだと思ひます。

予科の南石福次郎先生は髭の立派な方で、先生は常に洋傘を持っておられました。

或るとき先生が「東京出張で次は休講」と申されました。そのとき「先生東京にも傘を持って行かれますか」と、大きな声でいった者がありました。すると先生は「雨はいつ降ってくるかわりません」と、すましておっしゃつたのです。このときは先生もクラスのみんなも大笑いをいたしました。

また別のとき「先生の髭は新島先生の髭に似ています」と、いった者がありました。

先生は「髭は似ていませんが額の傷は少し似ています」と、いはいっこりされました。謹敵そのものの先生ですので、このようなどとは非常に珍らしいことだと思ひます。

大学の教室のある致遠館の中央は通りぬけになっていて、上には徳富蘇峰翁の特徴ある書体の館名の額が掲げてあります。そこを通つた裏側に購買部の売店があつたと思ひま

す。

パン・牛乳・ノートなどのほか、時代が時代ですので教練用の巻きゲートルも売っていました。木のベンチが並べてありましたが、あまり広くないので、いつも混雑していました。

売店の西隣りと思いますが、靴屋の出店がありました。

職人が一人いて、いつも熱心に靴を作っていました。名人芸といいたいようなあざやかな手ぎわにはいつも見惚れていたものです。

この店は早瀬といったと思いますが、主人は若い学生を相手にしているのが楽しいらしく毎日出店に来ていました。いつも、ねずみ色のソフトを頭に被り、物静かな小父さんでした。私たちはカバンを預けたり、友人との連絡を頼んだり、大変世話になりました。

靴屋の出店はもう一軒あり、和田といったと思います。

東門のおばさんを野崎昌さんといい、一九四三年（昭和十八年）に亡くなったことを、「同志社歳記」で初めて知りました。

或るとき、私の友人のK君（故人）が彼の父親からの手紙が達筆すぎて読めないで困っ

ていました。いつもの「送金する、無駄遣いをするな」という決まり文句とはわけが違うようだということです。

もちろん私だって読めるわけではないので、二人で思索のあげく、東門のおばさんに頼むことになりました。おばさんは何の苦もなく読んでくれました。K君を婿に望んでいる家があつて、その家のことが書いてあつたものでしょう、このときはまだ大学の二年だったので断つたのですが、結局卒業後その家に婿に行きました。

K君が亡くなって、もう二十五、六年になります。いい友人を失って惜しいことをしました。

神学館（クラーク記念館）と理化学館の間の相国寺寄りにまだ新しい学生会館があり、一階？ が食堂になっていました。

ライススカラーが十五銭くらいだったでしょうか。

有終館では予科の事務を取り扱っていました。

成績表や汽車の割引証を貰いに行ったものです。有終館の額は海老名弾正先生筆と聞い

たように思うのですが確信はありません。

額の下の石段上に応援団が陣取って、応援歌や手拍子の練習をさせました。

試合が近くなると、選手一同を石段に並べて激励のセレモニーを行いました。そんなときは応援団の長く大きいのぼりが二流、二階の窓から下げられるのが常でした。

アーモスト館は、出来て間もない頃でしょうか、とてもスマートな建物で、他にあまりないようなスタイルだと思っていました。

旧図書館もよくご厄介になったところですよ。コンクリートの床に足音の響くのが気になったことを覚えております。

その頃は、新島先生の遺品庫も良心碑もなかった頃です。いつの間にか半世期以上経ってしまいました。思い出すまま、駄文を書き綴ってしまい、恐縮に思います。

母校の限りの発展を祈ります。

（昭和十五年旧制大学経済学部卒業・三戸町立歴史民俗資料館長）

# 新島襄の洗濯

伊藤 彌彦

## 2 衝撃

ことを意味していた。ベルリン号における二十三日、乗り換えたワイルド・ロウヴァー号におけるあしかけ一年と六六日におよぶ船中生活はなにをもたらしたであろうか。

## 1 起論

新島襄の「同志社大学設立の旨意」の冒頭に「余不肖海外遊学の志を抱き、脱藩して、函館に赴き、遂に元治元年六月十四日の夜、竊かに国禁を犯し、米国商船に搭じ、水夫となりて勞役に服するおよそ一年間、やうやく米國ボストン府に達したりき」と。今日のよう飛行機でひととびしてホームステイや留学するのはわけが違ふ。密出国し「勞役に服」しながら一年三ヵ月ほどかかりやつとボストンに上陸したのである。この期間は青年新島にとって相当大きな事件であった。従来の説明によると、たとえば『同志社百年史 通史編I』ではこの間聖書三昧の生活に没頭

しイエス・キリストの愛を発見したとある。たしかに聖書をよみ信仰を深めたのも事実であるが、今度刊行された『新島襄全集 5』（以下、全集5と略す）の「航海日記」をみる限り、右のような青白き求道者とはおおよそ異つた青年新島の姿が浮び上つてくる。

脱出したのは満年齢に換算して二二歳、現代ならば大学卒業もそろそろという年齢にあたる。すでに不満ながらも安中藩で一応の自己形成をおえていたが、他方では米國文明に強いあこがれをいだく感受性に富んだ青年でもあった。すなわちそのことは異質文明に接したときに、全面的にそれにイカレてしまつたには余りにも大人であるが、さりとて何も影響をうけないでは余りにも柔軟である

「航海日記」のなかには三度洗濯にかんする記述がのこされている。元治元年六月二一日（一八六四年七月二四日）、元治二年正月元旦（一八六五年一月二八日）、そして一八六五年五月一七日である。

このうち最初のもものは密出国七日目、ベルリン号における記述である。

廿一日 ソアンデー 晴

今日は凡一度程も走しと思ふ。決まじり瞥不見山今は繻半三枚を洗ふ。我家に在し時自衣を洗らわす、然し今は學問之為とは申ながら、自ら辛苦を知るは是又學問之一と諦らめり。乍去父母をして此辛苦を知らしめば必らず四行の涙潜々ならん

吾今言語通ぜざる故空ク支那人之指揮を受けり、然し他年彼等をして豚犬之如くならしめん

廿一日

不堪慨然偶然得一詩

自從辭函楯 空被役洋人

憂國還憂國 憤然不思身

今日猶在遠州沖

また翌二二日にもつぎのような日記がある。

廿二日 半晴

吾思〔ふ〕、今日船右舷紀州地方ニ当らん。

午時左舷東方二一の島を遙に見たり、此島如何なる名なるを知らず

甲比丹一切書を教へず。外に一人有りし故此者に教授を頼みしが、甲比丹同様貪慾鄙劣の者なる故、七ツか八ツの語を聞〔き〕且一語三四度も教呉れしニ、真似出来ざれば怒声を発し、或は鼻と頤に手を掛け口を開きて、  
ポと云へと申せし事も有之候

どうやら乗船一週間にして青年新島は最悪の精神状態に落ちこんでいたようである。まったく言葉の通じないなかでカルチャー・ショックの波状攻撃にさらされて、刀に手をかけそうな人格破綻寸前のところで怒りを日記にしるし、漢詩に託してしのいだのである。

その諸原因を列挙しておけば、1言語不通、2襦袢の洗濯、3中国人や洋人に命令される、4空しい労役、5学問不振、6発音学習の困難、7他人に顔を触られる、等である。二、三その中味を分析しておく。

襦袢の洗濯 新島は生れてはじめて自分の手で自分の下着を洗い、そして猛烈な屈辱感を味わっていた。当時の武士がそうであったように新島もこの種の雑事は武人のたしなみに反すると考えており、この憐れな姿を両親は四行の涙をもって同情してくれるだろうと自己憐憫するひとりよがりで無能な青年だったのである。そしてすべての屈辱を「学問の為」「憂国の為」ということで合理化し自己説得して我慢した。つまり、新島青年は伝統社会の風俗と価値観にとつぶり浸った武士の子だったのである。

これはひとつは武士社会の風俗に由来する。幕末大半の下級士族は職人と変らぬ内職仕事に従っていたが、それを肯定してみせる哲学はまだ存在していなかった。儒教はそれを小人女子の仕事とみなしていた。貧乏に生れた孔子は雑事に長じていたが、それを恥として「多能鄙事」といった。その「鄙事多能」

に居直った例外は福沢諭吉であった。三歳で母子家庭となり家事万端を手助けし、障子張りでは親類に出張する腕前だった福沢の場合には、「学問は米を搗きながら出来るものなり」(「学問のすすめ」)と開き直ったまれなケースであった。新島襄の家庭は藩の実力者の祖父と書道塾の内職兼業の父の二人が禄を得ている比較的恵まれた家であり、力役に手を下すような内職もしていなかった。いわば「限りなく士士にちかい下士」であった。だから自ら洗濯をしなければならなくなった時に自我の危機にみまわれたのである。

空しい労役 右とふかく関係しているのが新島襄の労働観である。明らかなことはこの時期の新島は肉体労働を空しいとみなしていたことである。儒教的封建道徳においては治平天下の任に関わる心労を尊び、肉体労働を卑しんでいた、前者が君子の仕事であり後者が小人のそれであった。つまり労働は奴隷の職分とされていた。安中藩において心労の基礎となる学問の機会を奪われ、藩の雑務をあたえられたとき青年新島は鬱勃の氣勢おさえたがたく、「父の意に反対し、主君の意に反対し、全藩士の誹謗に無頓着に勉勞」し「統

いて国禁を犯し、米国船にのり脱走し」たのであった（『漫遊記』明治二十二年七月二日、全集5）。しかし皮肉にも米国船上ではほとんど学問する時間がなく肉體労働ばかりがまっていた。いままで以上に空虚な時間が一身をおそった。新島が労働観を變革するにはまだ時間がかかる、旧い伝統社会に育った旧世界の価値観の主として新世界の船にもぐり込んだのであった。

「支那人」「洋人」のこと 具体的にどんな光景が起ったのかは推測のほかないが、中国人や米国人に激しく強い憤怒を発し、しかもそれを道義的口吻をもって飾っていたことに注目しておこう。

中国人との関係では、洋人と英語が通じないというコミュニケーション障害の結果、中国人（多分人夫であろう）から命令されて働くことになった。それを屈辱とし、やがてかれらを「豚犬の如くならしめん」と未來に復讐心を投影して意気まいた。新島も多くの幕末の攘夷論者と同じく単細胞的なメンタリティーにまだ支配されていたのである。

洋人との関係では英語教授を依頼してみたあとで、なぜか「貪欲鄙劣の者」と語気を荒

げる。おそらく授業料でも要求されて、下劣な野蛮人だと感じたのではなからうか。

憂国の漢詩 さて今日大変有名なかの「憂国また憂国」の漢詩は、「慨然たるにたえず、偶然一詩をえたり」と前置されているように、このような滅々たるカルチャー・ショックの只中でつくられたものである。

函楯を辞してより

空しく洋人に役せらる

憂国また憂国

憤然として身を思わず

たとえ海外雄飛の壮志を抱いていたにせよ、このころの青年新島は旧世界の価値観と習俗にどっぷり浸った状態で、突如言語も通じず習慣もまったく異なる別世界にとび込んだのであった。そこで既成価値観を無視され屈辱感に耐え、怒りで爆発しそうな自我抑えながら詠んだのがこの漢詩であった。屈辱感をこえるテコとなったのは武士的使命感、「学問」や「憂国」であった。

言い換えればこの時の憂国の情とは、異質文明の真只中でただひとり異常な孤立状況に

追いこまれた人間がしばしば示す感情的反応とみるのが適當である。この漢詩は青年新島のカルチャー・ショックをあらわす詩として理解すべきであって、新島襄のナショナリズムを代表する詩とみるべきではない。別稿で論じたように（『レゴ』15号）新島のナシ

ョナリズムははるかに自由主義的である。ベルリン号における二三日の体験は青年新島を容喙なき手荒さでおそった米國文明のオリエンテーション期間であった。

### 3 成長

上海でワイルド・ロウヴァー号に乗り移った新島襄は「実に虎口を脱しやうやく佳郷に入りし心地なり」と記していたように生活ははるかに快適となった。早々テイラー船長に長刀を贈呈し、下着二枚のお返しをうけるなど今度はすべり出しのコミュニケーションも上々であった。テイラー船長はすぐ新島襄の人並みはずれた資質を見抜いたようで、思慮深くかれを一般水夫から遠ざけて船長室付とし、ときには一緒に船の位置測量を行なうことを楽しんだ。

乗船八日目に中国人のボーイが休暇をとつ

たためにその雑用が新島襄にまわつてきた。ここで新しい体験をする。「船主頗る温和にして我を役するに甚殷懃なり」と書いている。労役を頼まれたときに奴隷あつかいされないで、人間的に遇されたのである。西欧においても労働はなからく奴隷の職分とされていた。それを打破して近代の労働価値説を定着させたのは十七世紀ピューリタンの生活実践とロックの哲学であった。そしていま清教徒テイラーはごく自然に人間の行うべき事として新島に労働を依頼したのであった。つまり肉体労働というものが身分制や価値序列とは無関係にあることを身をもって体験することとなる。これらを通して新島の労働観は確実に成長していった。

ワイルド・ロウヴァー号では七日毎に自衣を洗濯している。そして元治二年の元旦も洗濯日であった。その様子を日記にこう詠っている。

元治二年正月元日なり

たちねは如何有けんけさの春  
古郷のけさは如何なる色ならん

つらき勤の春も知らまじ

元日に衣をそくは如何なるぞ

去年の旧あか洗抜とて

この洗濯の和歌にはもはや屈辱感は一かけらもない、むしろ元旦の朝まで洗濯している自分を諧謔味をこめて詠ずるまでにゆとりが出ている。また連想している父母の像にしても以前のような憐憫をもとめる風は一切消え、「よもや息子が元旦に洗濯するなどとは思ひもしてまい」と「つらき勤の春」をむしろ誇らし気に語っている風情すらみえる。明らかにたくましい精神を身につけたのである。そして漢詩のなかにものびやかさが出てくる。

### 有感

家を離れて初めて解す天の潤きを  
海を航してかえって知る地のすくなきを  
櫂を脱してこの身千里に駆る  
枕頭なお是れ郷家を夢む

ここに詠われたひろき天に象徴されるものは何であつたらうか。ここで脱した櫂（くび

き意）とは何であつたらうか。櫂とはたんなる藩主や父だけではない、かたくなに自分が凝りかたまつていたところの旧世界の古い価値観のこともあった。それから解放されたとき初めて天のひろさを理解しえたのであった。

またうたう

### 船中偶成

何百の白駒去つて匆匆

往時けむりの如くすべて是れ空し

かち得たり我身筋骨骸なるを

一年強半船中に在ればなり

喧騒をきわめた旧世界の出来事はみなまほろしのように遠ざかつてしまった。そして現実の自分は新しい世界に出合い、一年ちかくの労役を通じて想像もつかないような筋骨たくましい身体となった。自信にあふれまぶしく光る青年新島襄が生れたのである。

そしてこのころ、ワイルド・ロウヴァー号に乗船して九ヶ月過ぎの日記に洗濯にかんする三度目の日記が書き残された。

Wed. 17th day. May.

今晚四時より六時迄雨降る。雨水を取り我衣を洗へり、且船主の下衣、褌、枕覆等を洗へり。午後二時に又雨降れり

このように淡々とさりげなく自衣のみならず船長の下着まで洗濯したことを書けるようになったのである。

#### 4 意味

米国船上一年三カ月の労役生活をのちの新島裏はどのように意味づけていたであろうか。これに関する二つの文章を見つけることができた。

ポストン上陸四カ月目、フィリプス・アカデミー時代にまとめられた「箱櫃よりの略記」(全集5)のなかでこう書いている。

我持前の役目は勿論、自分の衣類を洗ひ且補綴し、空しく光陰を送れり、然し余「暇」あれば文を学べり。我重衣の裏を取り筒ばふ綿半を為れり。吾茲に於て深く父母眷顧の鴻恩に感じ「苦を嘗て知れ親の恩」と云へり  
同二年正月元日、古郷如何を感じて

古郷のけきは如何なる色ならん

つらき勤めで春も知らまし

且つ衣物を洗濯して

元日に衣モそぐはいかなるぞ

去年の旧あか洗抜くとて

あの新島裏が自分の着物をほどいて、筒ばうや襦袢を仕立てている光景はほゞえましくいい話ではないか。そしてこの時「吾茲に於て深く父母眷顧の鴻恩に感じ『苦を嘗て知れ親の恩』と云へり」と書くことができた。自分が働いてみてはじめて世の中ではだれかが労働しなければ何も作れないことを知り、いままで自分の身辺のことを無償で行なってきた親にすなおな感謝の念をいだけるようになったのである。それは儒教の形式的な孝ではない、有難さを感じると自然な感情であった。であるからアメリカの保護者にたいしても「衣類を補綴し且つ洗濯し呉れし事、実に我母の我を待するに勝れりと云つへし」(同、略記)とすなおに頭を下げることでできたのである。もし一日の飛行機の旅で米国家庭に入ったのであればこんなにするなり適応できなかったであろう。ワイルド・ロウヴ

ア一号の一年数カ月はじつくりと人物を成長させるオリエンテーション期間であった。

つぎに細かい点だがこの「つらき勤め」の和歌が以前に比べて少し変わったことに注意していただきたい。「航海日記」では「つらき勤の春も知らまし」(A)が、ここでは「つらき勤めで、春も知らまし」(B)に変わっている。文法上はどちらも無理な個所があるけれども、新島裏は同じ詩や和歌に時によって少し字を置きかえて新しい意味をこめることをよく行う。航海中の(A)では、「自分がつらい勤めの春をむかえている現状を親は知らない」と親を想つての和歌であったのが、上陸後のフィリプス・アカデミーのときには(B)、「自分はつらく激しい労働を通して春を知るであろう」と働く自分の立場と心情を強調する内容に変わった。つまり親ばなれが進み、一段と労働と自立性を強調するように意味づけられたのである。

船中労働の意味を語ったもう一つの文章は初期同志社の教え子、蔵原惟郭にあてた明治十八年五月三十日の書簡にある(全集3)。  
働きながらの米国留学を志す蔵原への忠告と激励の手紙である。

当時御労働中甚ツラキ事もあるべし、然シ古来大事業を為せし人物中大名カ黄金家ニ生れし者甚稀ナリ、労働ハ人生之良業ナリ、苦難ハ青年之業を成スノ楷梯ナリ、小弟昔時労働セシ事一年ヨ、又人之糞汁迄モ洗ヒシ事アリ、是等之事ハ今日ニトリ小弟ヲ益スル殊ニ甚ダシ、愛兄ヨ恐ブベシ、忍ブベシ、疲勞克ク兄ヲシテ眠ラシムベシ、人勞シテ初メテ黄金ノ貴キヲ知(ル)、日本ノ乳臭書生多クハ金ノ貴キヲ知ラズ、乞ヒサヘスレバ事容易ニ成ルベシト思ハラルニハ甚困候、兄ヨ忍ブベシ、落胆スル勿レ、労働ハ兄ノ本国ヲ発スル時ノ覚悟ニアラズヤ、坐シテ人ノ助ケヲ受ルヨリモ勞シテ自ラヲ助クノ貴キニ如カズ、

この手紙を読むとき、「航海日記」にさりげなく書かれた三度目の洗濯が船長の糞汁まで洗う激烈なものであったことがうかがい出ている。新島には礼儀のたしなみがあったし、自虐家でもなかったから不必要な船中の苦勞を他人に言うことはなかった。けれどもいま愛する同志社の教え子が、自分のたどったのと同じ道歩いてアメリカで苦勞しようとしている際には、自分の過去の経験を赤裸々に

語り、このように情愛あふれる手紙を書いた。教育者としてのえらさき、暖かさに溢れた一面である。体面を気にしては書けない文章である。

この引用の後半部では、一年三カ月の労働で成長していった青年新島自身の姿が告白されている。つまり、「人勞シテ初メテ黄金ノ貴キヲ知(ル)、日本ノ乳臭書生多クハ金ノ貴キヲ知ラズ、乞ヒサヘスレバ事容易ニ成ルベシト思ハラルニ甚困候」とはベルリン号乗船時の青年新島の姿ではなかったか。乞いさえすれば英語を学べると思い、拒絶されると「貪欲鄙劣」とのゝしつていた世間知らずのこの青年は労働に服することによって成長を達げた。「労働ハ人生之良業」なることを身体で知ったのである。洗濯に象徴される労働を通して新島裏が洗い落したのは旧世界の「旧あか」であった。

後年、新島裏の追悼集会で小崎弘道は、むかし新島裏がおこなったイエス・キリストの洗足についての説教の様子を語っている。そのとき新島裏は「色々自身の実験上から、キリストの謙遜——ヘリクダリの話」をし「満場の人は涙を流し、一言のコトバも出ず」感動

が会衆を支配したという(『六合雜誌』一一号)。このような実存的なはなしができたのは、かつて船中一年三カ月の労働の体験が生かされたからではなからうか。

かつての日本海軍は泳がない新兵をいきなり海にほうりこんで水泳教育をしたという。言葉も文化もまったく異なるベルリン号に乗り込んだときの新島裏は、カルチャー・ショックの海なかで、こんな状態ではなかったろうか。そこにおける二十三日は手荒らい、しかし効率的な米國文明へのオリエンテーション期間であった。つぎのワイルド・ロウヴァー号の一年二ヵ月という時間は短くして短いものではない、賢明なテイラー船長の下におけるこの期間は、あたかも良質のワインが船底でじっくり熟成してゆくように、希有の逸材新島裏が新世界の文明にむかってゆっくり成熟していったオリエンテーション期間であった。

(大学法学部教授)

# 国際人であること

シユペネマン クラウス

最近、日本では「国際化」という言葉が流行語の一つになってしまった。

私はこの言葉を耳にする時、自分自身は果たして国際人なのだろうか、自問してみるのが常である。日本女性と結婚し、ドイツ国籍は持っていますが、ドイツを外国とみなす三児の父としても、又来日以來十七年にもなるのに、日本のことが理解しきれない人間としても、自分は果たして国際人であるかと問うのである。

そして、この問いを幾度となく反復して

も、自身の過去をいくら究明しても、その解答を見つけることは至難の業である。

私は、ヒトラーがポーランドに侵入し、あのいまわしい第二次世界大戦に火をつけた時より二年前に、ベルリンで生まれた。

当時、ベルリンはドイツで最大の、そして最も国際的な都市であった。しかし、この点に関しては、勿論私の記憶に残ってはいない。というのは、私が二歳になるかならない内に、私の家族は、現在東独となっている古い小さな都市に移り住んだからである。そこ

で、私は幼年時代を過した。間もなく、戦争になり、ナチが起つたので、この暖かく保護された環境に安穩としていた訳にはいかなかった。ドイツは諸国と陸続きで接しているので私の幼ない日の想い出も、他国との接点の中に浮かんでくる。ある日、当時、ドイツ国防軍参謀本部の高官であった伯父が、彼の兵卒であったポーランドの若者を連れてきた。そこで、彼のドイツ語の勉強のため、私は自分の貴重な教科書を貸さねばならなかった。その晩、私は泣きあかしてしまった。このポーランド人がその本を破り捨てて、学校に行く時、何も教科書がないことを恐れたのだ。

戦争が終った時、私の町はまずアメリカ人に占領された。戦車に座るアメリカ兵たちは、私たちが夢にまで見たチューインガムやチョコレートを見せて、子どもたちをだんだん近くにおびき寄せた。しかし間もなく、この町が世界政治の駆け引きの的となった。東西の境界線の真直な線引きのために、私たちの住んでいた町とその近辺は、ソ連の占領下に入る事になった。ドイツ人たちにとって、ロシア人は以前から無気味な、危険な民

族とみなされていた。その事を誰も言ったことはなかったけれども、私もロシア人を恐れていた。現に、私たちは私たちの大きな、美しい家を出て、それ迄召使いたちのために使用されていた屋根裏部屋に移らねばならなかった。私たちの住んでいたところには、ロシア人が住み、夜、ロシア人の男性たちがウオッカを飲んで、酔うと、それ迄私たちが大切にしてきた家具や戸にピストルで穴を開けた。しかし、私たちの家に住み込んだロシア人将校の夫人や子どもたちは、それ迄の残酷で危険なロシア人のイメージを変えてくれた。婦人たちは私の母のように暖かく親切だった。時折、彼女たちは私に食物や甘いものを呉れた。又、その子供たちとは、言葉が通じなくても、ドイツの子どもたちと同様に遊んだものだった。

一九四九年、私が丁度十二歳になった時、私たちはロシア人から逃れ、当時もう、かなり開放的で、国際的になっていた西独にもどってきた。ここでの体験も、幼少時のそれと比較してもかなり印象的だった。夏休み、私は自転車で時折、それ程遠くないオランダに出掛けていった。私が十七歳になった時、高

等学校で選ばれて、戦後一回目の国際サマーキャンプに参加することが出来た。その英国でのキャンプで奇妙に感じたことは、彼らは、私がドイツ人であることを知ると、途端に冷たくなったことだ。通常ドイツ語が巧いオランダ人も、私のパスポートを見ると、一言もドイツ語で話してくれなかった。一度、あるオランダ人が口を開き、激しい口調で、「君は君の国の兵隊が私の町で何をしたか知っているかい？ どれ程多くの家が破壊され、どれ程多くの人々が殺され、どれ程多くのユダヤ人がアウシュヴィツ等のガス室に送りこまれたか知っているか？」と言った。それ迄、私は無知だった。私の住んでいた狭い世界での学校や家口をつぐんでいた。戦時下の事、国家主義のことはタブーだった。誰も話さなかった。一度、私は左翼の雑誌を学校に持って行き、教師に尋ねたことがある。ヒトラーが戦争を始めたのだろうか。アウシュヴィツに一体どんな事が起ったのか。……と。すると、彼は戦争はいつの時代にもあったのだし、それはいつでも多様な残酷さを伴うものなのだからだけ答え、口をつぐんでしまった。

ドイツでは当時でも、以前のようにドイツ国歌を唱っていた。ただ、ヒトラーが台頭することによって悪評をかった例の「ドイツ、ドイツ、冠たるドイツ……」の第一節のみは省かれ、第三節の「ドイツ祖国のための統一、正義、自由……」はそのまま使われていた。そのテキストはドイツの分裂状況に適していた。メロディもそのままであった。ドイツは戦前に比べて小さくなっていったが、今でも世界の中心としての意識が残っている。学校では、ドイツはヨーロッパの一部分であることが教えられていたのだが。そして、ドイツの文化、価値感、学問などがドイツの利益のためばかりでなく、ヨーロッパ諸国の繁栄のために用いられるようになってきたと教えられていた。しかし、ドイツの文化、価値感や学問も問題を持つていることを後になって、私は悟った。

私が学問を始めた頃、フルブライトの奨学金を貰って、一年間、シカゴで学ぶチャンスが与えられた。私の教授の多くは、私が何故アメリカで学びたいのかと尋ねた。私が学べるような学問はない筈だ。哲学も神学も、伝

統のあるドイツの方が、より良く学べるのではないかと、彼らは異口同音に言った。

そこで、私は米国での留学を正当化するため、私はアメリカで学問をしようとして行くのではない。ただアメリカ人の生活を知りたいのだと答えた。確かに、自分の視野を拡げるために、それは非常に必要だった。

アメリカへの旅は当時、船で、十日間もかった。船がゆっくりと港を離れ、ヨーロッパ大陸が夕暮れの中に見えなくなっていくと、私は二度と故郷に帰れなくなるのではないかと不安にかられた。アメリカでの適応は簡単でなかった。高校で良い英語の授業を受けていたので、感謝すべきことに、言葉の障害はまるでなかった。がしかし、アメリカは異質の世界だった。当初、私の周囲にいるアメリカ人のように振るまうことに抵抗があった。

寮に、以前散髪屋をしていた学生がいた。毎土曜、一ドルで髪を刈ってくれた。私は、ドイツ式の髪を切られるのがいやだったが、彼は私の髪を少しづつ短かくしてしまった。土曜日毎に、それは短かくなり、半年後にはまるでアメリカ人のようになってしまった。

しかも、ドイツ式のオックスフォードの発音は消えて、アメリカ人のように話すことができるようになったので、アメリカの学生と間違えられるような破目にさえなった。

一年後、ドイツにもどると、ドイツは非常に小さな国として目に写った。通りや家のみでなく、人々の考え方も狭隘きやくわいなものになってしまった。私が最初にポップコーンを作ってみせると、私の家族はびっくり仰天し、アメリカ人はドイツで動物しか食べないものを食べているのかと聞いた。当然、私の小さい町でも、遠い国アメリカについて報告する機会が与えられた。ある講演の際、丁度アメリカで起っていた市民権運動について話し、黒人も白人と同様の権利が与えられる同じ価値をもった人間であることを述べると、小さなスキャンダルとなり、二度と講演を依頼して来なかった。そればかりではなかった。

私がアメリカに居た時、ドイツを愛していたのに、社会主義者やユダヤ人ということではアメリカに亡命してきたドイツ人や、アウシュヴィッツで両親を殺された私と同年輩のドイツ人と知り合いになった。そこで、私は始めて、ドイツが人類にとって祝福される面ばかりか、その罪過を負っている面があることも知らされたのだった。その上、私はアメリカで日本の若い女性と知り合いになり、結婚する決心をした。そのような国際結婚は、当時では極めて稀な事だったので、将来の生活のこと、特に子どもたちのことを考えると、それはかなりの冒険だった。誰もそのような不安を理解してくれようとはせず、むしろ、神が創造した人種を混ぜてはならないとさいう教授がいた程だ。しかし、私はキリストにおいて、人種は一つにされたのだと確信していた。故に、二つの異った文化遺産を大切にしながらも、そこから新しいものを築き上げられたらと願っていた。

十七年と二ヵ月、私は日本で生活し、仕事をしている。不充分ながら、日本語で話し、考え、夢さえ見るようになった。しかし、私は今日に至る迄、日本人にはなっていない。私の周囲がそれを妨げているのだ。私を長く知っている知人さえも、時には箸を使うことがあるのか、畳に寝ることができなのか、又日本人のようにお正月を祝うのかと、大真面目に私に尋ねる、そればかりではない。人は

そこで成長した文化や社会の中で、自分自身をつくり、洋服のようにそう簡単に文化遺産を着かえることができないと思う。今でも私の考え方はドイツ的である。ドイツ語で聖書を読み、日本の教会で皆と一緒に「主の祈り」を唱える時、私はドイツ語を使う。神が私の日本語を聞いてくれるとは今でも信じられないからである。そして、その考え方もある程度、理屈にかなっていると思う。というのは、私の考え方が違うからこそ、この国で少しでも役に立っているのではないかという気がする。

他方、私は自分を育てくれた故郷や文化

## キャンパスの年輪

―同志社今出川校地― (増補改訂)

B5判 二二二頁

一、五〇〇円 (送料三〇〇円)

社史資料室長 河野仁昭著



に距離を置き、批判的に見るようになった。自分でドイツ人であるこの誇りよりも、ドイツの歴史が背負いこんだ責任を重く感じている。時々、ドイツに帰って、そこでの生活と人間のつきあい方を見ると、自分の国でもアウトサイダーになっている自分に気がつく。ふと、私はどのような人間になっているのかと考えることがある。

そんな時、ヘレニズムの一人の哲学者であったゼノンの事を想い起す。アリストテレスは人間はポリスすなわち自分の国や社会の一員としてのみ本当の人間であると教えた。それに対して、ゼノンは人間は、コスモポリテ

百十余年の歴史を経た今出川キャンパスには国の重要文化財に指定された五棟を始め多くの建物あるいは既に姿を消した建物があります。

これらの由緒ある建物に限らず石段・記念碑・樹木を中心に、普段余り意識されていない様なものも含めて、それぞれに纏わる話題を軽妙なタッチで書かれた文章に、新旧の写真・地図などを掲載した話題の豊富な美しい書物です。

また巻末には新島襄の足跡・田辺新キャンパス誕生の経緯なども収録し、校友・同

士いかにえればこの世界の一員としてはじめて本当の人間になると考えた。それを説明するために彼は人間が数多くの同心円の中で存在していると言った。そして、その中心部の近くにある家、町、地域に留まっている限り人は成長しない。一番外側の円である全世界まで足を伸ばして、この世界を自分の故郷にすることができると人間だけが他者と共に豊かに成長し、本当の意味での人間になれるという。

多分、この二千年前の哲学者は私たちよりも「国際化」の本当の意味を理解していたかもしれない。

(大学文学部教授)

窓は青春時代を、在學生は多くの先輩が残された業績をしのぶ格好の書としてご購入下さい。

◎購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込み下さい。

◎代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金下さい。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入  
電話(〇七五)一一三〇三七(八)

## タンザニアの自然と文化にふれて

鈴木重治

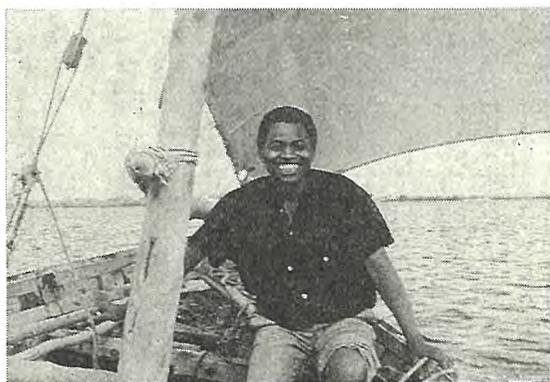
### 東アフリカへの道

大学院に留学しているアマニ君のふるさは、タンザニアである。彼は日本に来て五年になる。考古学を専攻していて、旧石器時代から新石器時代への転換期に関心をもっている。とりわけ土器の出現についての地域性を世界的な規模で考えている。さらに、最近では遺跡から出土する中国産の陶磁器にも興味を示している。ちなみに、タンザニアのスワヒリ語では、「アマニ」とは平和を意味している。

そのアマニ君が、I・C・O・M（国際博物館会議）のインターナショナル・コンファレンスがタンザニアのアリユンシャで開催さ

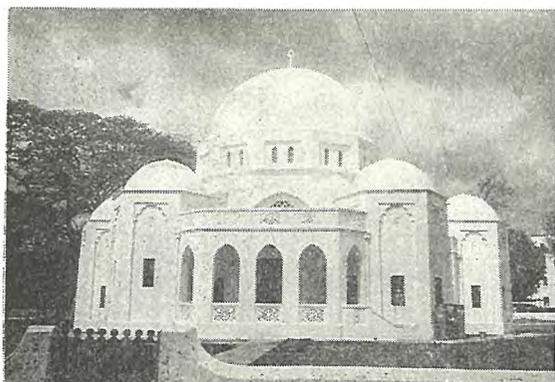
れるので、参加されませんかときそってくれた。一九八七年初夏のことであった。

アマニ君によるとオードヴァイ峡谷（世界各地の歴史の教科書に登場しているアウストラピテクスや、ジンジャーントロプス・アフリカヌスの人骨が多量の石器と一緒に出土した人類最古の遺跡の一つ）や、インド洋に浮かぶザンジバル島などで、中国陶磁を出土する遺跡を案内するという。正直言って、調査中の遺跡を現地で見学したり、出土遺物をつぶさに観察できるとすれば、国際会議以上に大きな魅力である。とりわけ、中国陶磁器やイスラム陶器を中心とした出土資料による東西交流に強い関心をもつ筆者にとっては、なま



留学生のアマニ君

の資料を現地で観察しておきたい地域の一つだからである。しかも東アフリカの遺跡から出土した貿易陶磁器については、従来イギリス人による報文が若干知られているだけで、日本人による実物の確認とその観察結果の報告が皆無であることから、陶磁考古学の分野では空白地帯とされてきた。つまり、東西交



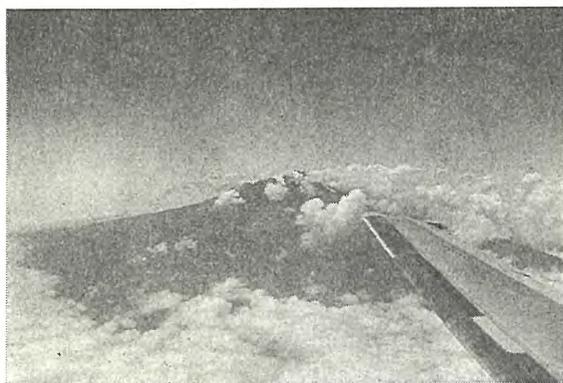
ザンジバル国立博物館

流の歴史を出土の陶磁器で検証する作業が重要な課題となっている地域だけに、資料の確認を手がかりにして、研究の進展やその糸口が見出せるのではないかという期待の大きい地域ということになる。それに首都のダル・エス・サラームが、現地語で《平安の港》を意味すると聞けば、平和でのどかな天然の良港こそが地域を越えた交易の基地であったこ

とを歴史がよく示していることを想い出す。インドのボンベイが《良い港》を意味する言葉であったり、ケニアのモンバサが《榮える基地》を表わすことにも通じている。

タンザニア行きを検討する中で、今回の旅行の目的を二ツにしぼることとした。一ツは、アジア産陶磁器、とりわけ中国産陶磁器の東アフリカへの歴史的な展開を示す出土資料を各地の遺跡で確認すること。他の一ツは、ナチュラル・ヒストリカル・ミュージアムズを含めて旧石器時代の代表的な遺跡を見学しつつ、それぞれの地域の自然とその環境を肌で感じとることである。

タンザニアへの道を選ぶに当って、より安全だというロンドン廻りではなく、タイ、インド、ケニア経由のルートを取った理由もきわめて単純である。つまり、マレーシアやインドネシアの海域を通って、インド洋へと運ばれた古くからの貿易陶磁器のルートをたどることにしたからである。マルコ・ポーロが中国から母国へ帰った道筋であり、海のシルクロードを陶磁の道に重ねたからでもあった。タンザニアへの道は、その延長線上にあ



万年雪のキリマンジャロ山

ることは明白である。

#### キリマンジャロと焼バナナ

タンザニアには国立博物館が三ヶ所にある。ダル・エス・サラームと、ザンジバルと、アリューシャとである。それぞれが歴史、民俗、美術、自然史の部門で地域的な特徴をも



タンザニア国立博物館の人達と筆者

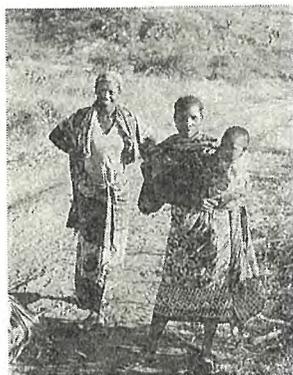
っているが、必ずしも充実しているとはいえない。資料の調査やその収集をはじめ、研究スタッフの育成、展示施設の拡充などに問題をかかえていて、とりわけ運営上の予算に苦慮しているように見受けられた。もっとも規

模の大きいダル・エス・サラームの国立博物館の場合でもキューレイター(学芸員相当の研究員)は、館長である考古学者のDr.マサオ氏と、自然史のカャンボ氏の二人だけである。

そのカャンボ氏が、夜中の二時だというのにアマニ君と一緒に空港まで博物館の車で出迎えてくれた。「ジャンボ」という快いひびきの挨拶が印象的であった。丸顔の目玉の大きいこやかな青年で、身長は一六〇cm程と小柄ではあるが、肩幅の広いがっちりとしたタイプの人である。光沢のある紫檀に近いチョコレートブラウンの肌と、きらめく程の白い歯は、いつも明るさをまき散らすアマニ君と同様である。アリューシャでの国際会議では、このカャンボ氏もアフリカに於ける自然史博物館の発展について研究発表をおこなった。

キリマンジャロに近いアリューシャは、内陸部に入った上に標高一、二〇〇mという高位置にあるため、八月の下旬だというのに、夕方になるとセーターが欲しくなる程に涼しい。八月の南半球の高地は、快適な気候である。なお、アリューシャは、おおむね南緯三

度、東経三十七度に近い。日中は気温も高いので、食事前のビールがうまい。ホワイトキヤップという商標のビールをケニアのナイロビで飲んだが、日本の中ビン程の大きさのビンに貼られたレットルには、頂上に雪をいただいている高い山が画かれていた。それにひきかえ、アリューシャでは、ついぞレットルの貼られているビールはお目にかかることができなかった。すべてのビールがレットルなのである。聞いてみると、レットルを飲むわけではないという。言われてみればその通りだ。二度と聞く気にならない程に完結で、あまりにもおおらかだ。それにしてもうまい。このおおらかさは、いたるところにあふれている。万年雪の帽子をかぶって、厚い雲海を



岩壁画のあるコロ付近の住民



草原中のジラフ

見おろしながらゆったりと姿を現わしたキリマンジャロも、雄姿というよりおらかなたがずまいだ。

国道を二日間走っても、なお信号機をみかけないようなところでも、放牧中の牛の群れ

の横断が優先である。道路標識にはスピード制限の表示は見当たらない。牛の絵を画いた道路標識が目につくお国柄である。

国際会議中の昼食時間も、二時間半とゆったりとつてある。ローカルフードを食べに地元の人達でにぎわっている体育施設の近くのレストランに入る。牛、羊、ニワトリなどの肉が、大きな塊りで並べてある。豚肉だけは無い。これは宗教上の理由によっている。

ひと抱えもある肉をばらしながら、炭火で焼いてくれる。ざらざらの食塩を振りかけ、手づかみのまま口へ運ぶ。食べきれない程の肉に加えて、焼バナナが添えられている。一本や二本でなく、山盛りである。料理用のバナナは細くて長い。焼きイモに似た味で、胸にもたれる。一回に何本も食べられるものではない。バナナといえば、街の市場で売られている赤い皮のバナナは、甘くてうまい。それにしても、おどろくほど安い。

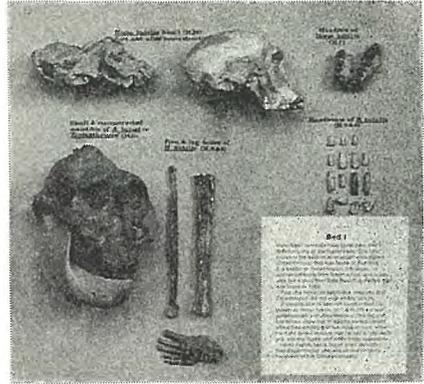
#### フラミンゴとオールドヴァイ遺跡

国際会議の期間中、二泊三日のエクスカーションが計画されていた。野生動物の保護区となっている自然公園二カ所と、旧石器時代



ンゴロ・ンゴロクレイターのフラミンゴの群

の遺跡見学である。それぞれの現地では、専門家によるレクチュアーと問題点の提起を含めた解説があつて、きわめて有意義なものであつた。マニヤラ湖近くの草原では、放置されたままのバッファローの遺体の向うの藪の影から、不意にキリンが飛び出してきたのに出くわした。川のほとりでペリカンの大群にもめぐり合った。燦々と降り注ぐ強烈な太陽



オールドヴァイ遺跡の展示室の一部

の下で、コーラで喉をうるおしながら走り去るジブラの一群にも目をやった。大きく深呼吸をせずにおられなかったのは、青空に舞うペリカンの大群のみごときと、空気のうまさを感じたからに違いない。同行の自然史博物館のフェリスタ氏によると、崖の上の集落の近くには石器時代の遺跡があるという。

遺跡といえは、ンゴロ・ンゴクレイターの野生動物保護区の中にも後期旧石器時代の遺跡がある。死火山となった広大な火口底の小高い丘に立地している。日本流に言えば、

阿蘇の外輪山に囲まれたカルデラの内部にある縄文時代や古墳時代の遺跡の立地に対比されようが、規模が違う。今では、ンゴロ・ンゴクレイターの場合は小川のほとりの小高い丘の上にも人が住んでいない。アフリカ象、ライオン、ハイエナ、サイ、カバ、ジラフ、イノシシ、レオパード、ガゼルなどの動物や多くの鳥たちが、群れをなしてそれぞれの地域を占拠している。文字通りの野生動物の楽園なのであるが、そのまま殺戮の舞台でもあり、自然界のきびしさをよく示している。

このクレイターの中央にある火口湖ほどファンタジックで心の安まる場所はない。青と水をたたえた湖の岸辺には、数万羽、いや数十万羽のフラミンゴが、あたり一面を埋めつくしている。よく見ると、ピンクのものやらピンクと白のまだらのもの、一本足で休むもの、羽根をばたつかせて隣にいる仲間を嘴でつつくものなどがいて、頸をかしげる表情などもほほえましい。離れてみると、火口湖の周囲を縁どる砂状の岩塩の光沢のある白さと、空の青さに映えるフラミンゴの朱色混りのピンクの拡がり、安らかな光景という



コロ・カンダガのロックペインティング (AD 900年頃)

より、ファンタジックな空間としか言いようがない。

外輪山の外側の斜面をゆっくり蛇行して抜け降りる。山麓の地形変換線あたりで、景観ががらりと変る。起伏のゆるやかな草原に出る。はてしなく続く大地である。砂塵を後に残してオールドヴァイ峡谷へ向う。人の気配は



コロのロックペインティング (BC 20,000年頃)

どこにも無い。それどころか道すら無い。水の無い川床が前面にみえたと思ったら、しばらくその中を走る。二時間程走ってようやく車が止った。額に色とりどりのヘアバンドをして、それに長い鳥の羽根を飾ったマサイ族の人達が数人たむろしている。額が見えない程に何重にも並べられたネックレスと、重そ

うな耳飾り、腕輪もみごとだ。白、黒、赤の顔面加彩もあざやかだ。ちなみにタンザニアには五十五以上の種族が住んでいるという。

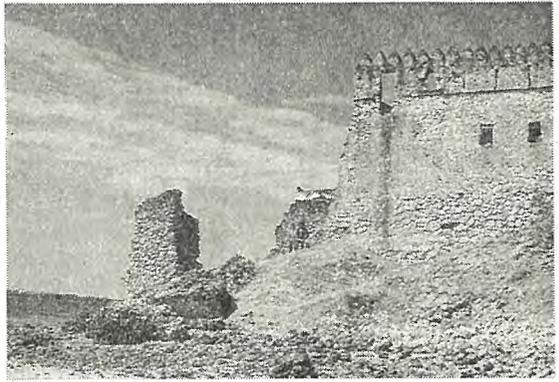
心おどらせてオードヴァイ峡谷に第一歩を印した。人類発生地の一つとして名高い遺跡群を前にして、きわめて新鮮な感動をおぼえた。中国での北京原人の周口店遺跡や、インドネシアのジャワ原人などの遺跡を廻ったときにも似た感動だが、一味違う。疲れを吹き飛ばして、目の色だけがかがやいていたにちがいない。

現地では、数年来発掘調査を継続しているバークレイのヨハセン博士が、自信にみちた調査成果を説明してくれた。レセプションの時に私の質問に答えてくれたケニアのリチャード・リーキー博士と同様に、地域性と環境の問題に強い関心をもっているという。ジンジャントロプスやアウストラロピテクス・アフリカヌスの出土地に立ってのレクチュアは、きわめてわかりやすい。近い将来に予定している発掘調査地区では、石器や人骨が層的な関係を明確に示す状態で包含されている地点を観察させた上で案内であっただけに迫力にみちたものであった。



アナヤラ湖近くの市場

五十年以上に及ぶリーキー博士ら親子二代に及ぶ息の長い継続調査をはじめ、イギリス人、ドイツ人、アメリカ人、ケニア人らの研究の実績は、発掘調査地点近くのキャンプや作業室、展示室などで強烈な印象を与えてくれたが、とりわけ「続けることこそ善だ」という指摘以上に、強靱な意志と研究へのあくなき意欲に満ちあふれていて、敬服以外のな



15世紀の廢墟キルワ島の遺跡

ものもなかった。一方、広大なオードヴァイ峡谷については、タンザニアの国立博物館を中心に、タンザニア人自身による調査がナショナルプロジェクトとして進行していて、すでにゼネラルサーベイによって分布などの基礎資料が蓄積されつつある。このことは、外国人への研究の場の提供による国際交流以上に、アフリカ考古学にとって重要な意義を

もつ。

つまり、自らの歴史を自らが検討するといふ点でも評価されるところであり、考古学上の国際交流に新しい動きが登場して来ることを予告しているものとして重視されよう。

#### キルワ遺跡と東西文化の交流

タンザニアには、さまざまな時代の多様な遺跡群が存在している。人類の出現期の遺跡をはじめ、岩壁画をもつ後期旧石器時代以降の洞穴や岩陰遺跡、イスラム教以前の集落遺跡、大航海時代の遺跡群、生産遺跡としての製鉄遺跡、廢墟となったモスクや砦をもつ港湾遺跡などである。博物館の展示資料でみろかぎり、これらの遺跡のうちとりわけタンザニアの間で関心の高いのは、出現期の人類と道具の発展、後期旧石器時代の岩壁画、製鉄技法の発展とその系譜、モスクや砦の美術品を含めた出土遺物などのものである。これらの中には、博物館に豊富な資料がありながら、ただ難然と並べただけという部門が見受けられた。これは研究者が少いために資料整理が進んでいないことにもよっているが、タンザニアでの学術上の資料評価が定

着していないことに起因している。とりわけ、土器や陶磁器の部門の立ち遅れがうかがえる。これはダル・エス・サラームだけでなく、ザンジバルに於てもまったく同様のことであった。

具体的には、何カ所にも及んで十三世紀から十七世紀までの中国産陶磁器やイスラム陶器が出土しているながら、復元作業はもとより、中国を中心とした国際的な研究成果が展示に生かされていないのである。江西省の景德鎮産の青花皿や浙江省の竜泉窰系の青磁碗などが多量を出土しているキルワ島をはじめ、ザンジバル島、ペンバ島、マフィア島などのインド洋に面した遺跡群は、東西交流史を検討する上でも重視してよい地域だけに、出土陶磁の整理には、大いに期待されるものがある。

これまで日本で紹介されたことのない遺跡や、遺物群が多いが、数百年も前に東アフリカへもたらされた数多くのアジヤや中近東からの陶磁器をみていると、中国、インド、アラブの商人達のたくましく旺盛な商業活動が目につく。タンザニア出土の陶磁器を観察すると、とりわけ中国の元代から明代にかけて



タンザニア出土の中国産貿易陶磁器

生産された青磁や青花と、同時代の青袖陶を中心とした単彩のイスラム陶器の占める割合が大きい。つまり、青磁では十三世紀の後半から十四世紀の前半にかけて、日本へも中国から搬入された酒海壺や蓮弁を体部に装飾した折縁の盤などをはじめ十五世紀に福建省や広東省で生産されたと考えられている見込に印花文をもつ端反りの碗などが、土着の彩文

土器などと共に出土している。

青花の碗・皿の出土量はとくに多い。牡丹文や龍文を体部に装飾して、腰にラマ式蓮弁を画いた壺や、玉壺春の袖裏紅などの資料は、破片とは言え優品であって、日本でもめったに出土しない。中国からインドを経て東アフリカへ持ち込んだ商人や、これらを受け入れた当時のサルタン達の我が意を得たりとする満面の喜びすら伝わって来ようというものである。袖裏紅は、高台裏に「玉春」の在銘をもつ青花碗などとともにマフィア島のキジマニイ遺跡から出土していて、ここからは中近東のコインも発見されており、もっとも重視してよい遺跡の一つである。

香辛料や象牙などを見返り品とする取り引きの対象となったものが、絹や陶磁器であったことはよく知られている。はるばる海を越えて相互に運ばれた多くの文物の中には、中継貿易や回遊貿易の対象物件として、沖縄や九州の港などに立ち寄つたものが含まれているかもしれない。出土資料には、それぞれに秘められた歴史があつて、人の動きを語りかけてくれるものがある。しかも歴史を語りかけてくれる資料は、相伴資料などとともに学

術上の評価が与えられることで、さらに雄弁さを増して行く。より多くの情報を提供してくれる資料は、水準の高い発掘調査によって裏付けられた性格のはっきりした遺跡からの出土資料にこしたものは無い。つまり遺跡から出土し、しかも出土状態の明確な資料で、より多くの相伴資料をもつものほど、質の高い情報をもたらすことになる。例えば、タンザニアでは、キルワ島の遺跡群などは好例であつて、東アフリカ全体を通しても学術上価値の高い一級の資料を提供している。すでに一部とは言え、発掘調査がおこなわれていて、相伴資料などが検証されているからである。

キルワ島へは、セスナ機をチャーターして渡つた。この島は、アフリカ大陸からインド洋へと注ぐマブジイ河の河口にあつて、大きな人江を背後に控えたみごとな船着場を脇にもち、砦とモスクが中心となつて遺跡を構成している。マダガスカルに近い良港といえよう。遺跡は、海岸に近い小高い丘の上に立地していて、ココナツやバナナの畑が背後にある。丸木舟が浜に打ち上げられている小さな造船所の近くで、漁師にたのんで漁船に乗せ



樹皮の容器を脇に置き屋根に土器を乗せているコロ近くの民家

てもらい対岸へと渡った。遺跡を一周すると、足元に中国産の陶磁器やイスラム陶器の破片が散布している。ここでは、十二世紀以前にさかのぼる資料は一片も見出すことができなかった。もっとも多いのは十五世紀代の資料である。

ザンジバル島、ペンバ島へも小型機で渡ったが、遺跡の数は想像以上に多い。漁村が島

の周囲に散在していて、大きな舟溜りや貨物船の着く良港の近くの丘の上の集落や、モスク、岩などに遺物が散布している。ザンジバル島では、スレイブケイブと呼ばれる奴隷の輸出基地となったという湧水を内部に持つ洞穴遺跡があったが、ここにも赤色顔料で彩られた彩文土器が散在していた。

ペンバ島出土の中国陶磁器は、キオンゴン、プジニイ、チャンバニイ遺跡などの遺跡から十六世紀の青花が出土している。十七世紀の資料も若干含まれている。つまり大航海時代の貿易陶磁器である。西アフリカのセントヘレナ島沖で発見された沈没船のウィックテレーウ号は、オランダの東印度会社に属した貨物船で、大量の中国陶磁器を出土したことで知られているが、この船の沈没した年が一六一三年であることは記録に残っていて、国際的にも出土陶磁の基準資料として評価されている。この資料に照らしらしてみても、ペンバ島出土の中国陶磁器は、その前後の資料として重要な意義をもつことになる。ケニアの東海岸を南下して、喜望峰を廻って大西洋へ出るのには、タンザニアのペンバ島、ザンジバル島、マフィア島、さらにキルワ島などが中継

基地の役割をはたしたことになる。つまり東西交流の実体の一部を、遺跡によって検証することのできる歴史の生き証人であり、国際的な歴史遺産として評価することがができる。

振り返って現代の生活の一端をみると、ザンジバル島やペンバ島では、谷水田での稲の栽培風景とともに、大量に生産されている香料の丁子の実が、どこへ行っても道路脇に干してあって、むせる程の香りが満ちあふれている。キリマンジャロ空港の近くでは、延延と続くトーモロコシ畑と日本の技術による井戸掘りも見られる。中国の援助によって開通したというタンザン鉄道を含めて、タンザニアには外来の文化や技術を受け入れる土壌があるようだ。現地ではスワヒリ語に加えて、英語が広く使われているが、ゆとりのある住いよりも、より多くの牛を飼い度いという価値感が一般的で、土着の文化を基調としながら、東西の文化を徐々に取り入れている様子が見えがえる。

アマニ君の同志社留学を契機に、日本とタンザニアの総合交流を心から願ってやまない。

(大学校地学術調査委員会調査主任)

# 映像化への眩き

## 上野 瞭

たぶんそれは、世評に高い『兎の眼』がテレビ・ドラマ化されたあとだったに違いはない。その頃会うことの多かった灰谷健次郎さんが、ふといったことがある。

「あのね、上野さん。じぶんの作品、じぶんで映画にしたいと思わへん？ そんなこと考えへん？ ぼくは思うんやけどね」

なぜそう思うのか理由は聞かなかったけれど、ぼくはその言葉に大いにうなずいた記憶があるのだ。

その頃ぼくもまた、自作の映像化ということについて、じつは焦だちというか不満とい

うか、索漠たる経験をしていたからである。

某民間テレビ局が、「子ども名作劇場」なる三十分番組をシリーズものとしてやることになった。その中の一作に、ぼくの『もしもし、こちらオオカミ』という作品をぜひやりたいと、出版社を介していつてきたことがあるのだ。

三十分といってもコマースャルがはいるから、正味二十五分くらいのドラマになる。

絶句した。

短篇小説のドラマ化なら、それでもできないことはない。しかし、ぼくの物語は短篇小

説ではない。現実には決して起こりえないような誘拐事件を描いたものである。一度でいいから新聞ダネになるような「誘拐された少女」になってみたいと思う六年生と、その少女に脅されて、しぶしぶ「誘拐犯人」の役を引き受ける気の弱い中年男の奇妙な交流を描いたものである。

ぼくは意識的に京都弁を使い、京都とわかる舞台設定をし、そうした独自性で物語のおもしろさを作りだしたつもりだった。

とてもじゃないが二十五分くらいの番組では映像化できる内容ではない。しかし、出版社サイドでは乗り気である。それですこしくらい本のほうも動くかもしれないと計算している。危ういなと思ったが、ぼくも最終的にはOKしないわけにはいかなかった。

何分、子どもの本といえ、初版三千部ばかり刷って、それで終りとなることが多い。いくら作者が胸を張って傑作だと叫んでみても、人目に触れる機会は少ない。

テレビにのるということは作品を薄っぺらなものにする危険性は大いにあるが、作品の存在を知らしめる点では大きい。ここは目をつぶって制作スタッフの腕に賭けるしかない

い。そう思ったからである。

ぼくのカミサンは、ぼくの不安をよそに、「それじゃビデオを買わなくっちゃ」といった。おずおずと、これにも賛成しないわけはいかなかった。

放映の当日、ぼくらはテレビの前に坐り、百年前からビデオなんかあるんだという顔をした。セットした機械が作動するかどうか、ひどく不安だったのに。

放映開始と同時にビデオは収録を始めた。画面のほうにもドラマが流れ始めた。

ワツ、ワツ、ワツと思わず腰を浮かしたの、ものの五分も経たないうちだった。あわてて立ちあがると画面のスイッチを切った。

カミサンがぼくの行動を阻止しなかったからだから、いかにチャチなドラマ作りだったかわかるだろう。猛然と腹が立って、つぎには「凌辱」されたような恥かしさが体を貫いて、居ても立ってもいられなかった。

制作スタッフが(下請けの映画会社というべきかもしれない)、「子ども番組」だから、この程度でいいだろうと、ドラマ作りの「引きき」をやっているといえはいいか。ともかく粗末きわまりない映像化だったのである。

ビデオのほうは、収録が終わった時、テープを取りだすとケースに入れて棚にほおりあげた。それから十年近く経っているのに、一度も再生したことがない。二度と見る気がしないのである。

そういうことがあって、一、二年経った時、今度は『ひげよ、さらば』のテレビ化の話があった。

放映期間一年、人形劇としてNHKでやりたいというのである。プロデューサーとディレクターとシナリオライターと人形作家の方が家にきてくれた時、「原作者として何か希望は……」といわれて、ぼくはつぎのようなことをいった。

「映像と活字はまったく異質の表現媒体ですから、好きなようにお作りになってください。原作を解体して、切って張って、できればミュージカルにしてみましたほうがいいですね。文句いいませんから……」

先の「子ども名作劇場」のことがあるから、ぼくはじぶんの「期待」に最初から水を差しておいたのだ。物語のキャラクターはすべて猫だから、水ではなく、「砂をかけておいた」といったほうがいいのかもしれない。

ぼくは、京都の吉田山から真如堂、黒谷墓地を舞台に、(もちろん、物語の中では、ナナツカマツカ、フタツハチブセ、アカゲラフセゴと名前を変えているが)記憶喪失の猫「ヨロウザ」、「片目」、「歌い猫」、「オオグライ」など、一癖も二癖もある野良猫を登場させ、猫に共同体は作りうるか。もし、それが可能な場合、どのような葛藤が起こりうるか……ということを考えていたのである。

読者はこれを、人間社会における「個」と「組織」の問題と受け取るかもしれない。また、細密な生態描写をやらなくても、猫たちの言動から、それぞれのイメージを作りあげられるだろう。

もちろん、ぼくはぼくに、キャラクターそれぞれのイメージを持っていたのだが、鶴見俊輔さんの言葉ではないが、読者は誤解する権利を持っている。作者の思いど通りに猫や思いのほどが読者に伝わらないとしても、それに文句をいう筋合いはない。

ぼくもまたかつて、フローベルやトーマス・マンの小説を、自由に、じぶんなりの受け取め方で納得したつもりになってきたからである。

しかし、人形劇とはいえ、キャラクターが視覚化されることは、読者の自由なイメージの拘束であり限定である。テレビ番組としては成功するかもしれないが、散文世界のあふくらみは喪失するだろう。

某出版社が、「見てから読むか、読んでから見るか」などといったキャッチ・フレーズを流したことがあるが、多くの人は、「見る」として「読んだ気になる」ものなのである。

「未読の読者」(?)を生む点では、テレビほど影響力の強いものはない。「もの書き」としてこれほど情ない話はない。

こういう不安はあったが、人形劇『ひげよ、さらば』は、Sさんというチーフ・ディレクターの想像以上の奮闘のおかげで、原作とずれる点があるとはいえ、なかなかのものになった。一年経って、「打ちあげ」の日、ぼくも呼ばれてNHK近くの会場にいったが、そこに五十人を優に越すスタッフと声優と人形操作者が集って、一年の苦労と感動を分かち合う姿は、まさに「映像と活字」の世界の違いをはっきりと示していた。

一日わずか十分の放映番組のため、一日中、時には深夜にかけて、ほとんどこれだけ

の人が動きまわっていたのである。

この日、すこし緊張して、ぼくは歌手でもある榎原郁恵さんと写真を撮ってもらった。彼女が「ヨゴロウザ」の声を一年間続けてくれたからである。彼女だけではなく、声優の方はみんな、じぶんが演じた猫と一体化している点で、『ひげよ、さらば』は、ぼくの「書いたもの」と、その人たちの「作りあげたもの」と、二つあったといえる。

可視的であることによって伝わるものと、不可視的であることによって伝わるものと、どちらがどうとはいえないだろう。

去年、再度、自作のテレビ・ドラマ化の話があった。今度はNHKといっても大阪のほうからである。ほぼ一年余、京都新聞に連載した『砂の上のロビンソン』を「ドラマ人間模様」にしたいというのである。

連載中からプロデューサーのYさんが声をかけてくださり、いよいよ本決りになった段階でチーフ・ディレクターのSさんとも会った。

ぼくの物語は、五人家族が、現代という不確定な状況の中を一年間「漂流」する姿を描いたものである。

Yさんが、これを四回連続で……といった時、ぼくは「四回？」とすこし信じられない顔をした。とてもじゃないが四十五分四回に収まる話とは思えなかったのである。

果して録画撮影が終ってビデオ・テープが送られてきた時、ぼくは溜息をついた。映像だから「切って張って」独自のものにするのはわかる。しかし、違うんだなあ……と、何度か思った。

ところが、新聞のテレビ欄担当の記者に会った時、「おもしろかったですね。試写で四回通して見てしまいました」と、ぼくの予想を裏切る意見を吐いたのである。記者氏は、原作のほうを読んでいなかった。

「あのね、映像と活字は違いますよ。それがわかった上でいうんですが、ぼくがね、あの小説の最後の最後に書いたこと、それ、生きてないんですね」

ぼくは、そういうながら、じぶんが「活字世代」であることを考えていた。それでも、最後に数行書いたことは譲れないと思った。そこに、ぼくは「核」のことを書いた。

(女子大学教授)

# 私の学生時代

## 小林正義

先年、久しぶりに母校を訪ねたとき、余りの変わりように驚き、戸惑ったことがある。

考えてみると、「もはや戦後ではない」と経済白書に書かれたのは昭和三十一年である。入学したのが昭和二十八年であるから、学生時代の四年間は、いわば戦後の復興期から発展期への転換の時であった。卒業後の急速な経済発展の中で、母校も急ピッチで変化し、発展もしていたのである。

京都に出たころ、四畳半一間、賄いつきの下宿代が月八千円くらいだったが、食糧難の時代で、金より米が歓迎されていた。賄いつきだと、米穀通帳を下宿に預けておくことも条件となっていた。

田舎に帰ると、ポストンバッグに米をつめてもどるのだが、車中で米の取締りがあり、びくびくしながら旅をした。鉄道公安官やお巡りさんのいそうな所では、重いポストンをいかにも軽そうに持ったりしたものである。食管法が生きていた。いまでは、とても考えられないことである。

外食をする人は、米穀通帳で食券を発行してもらい、外食券食堂で食べたが、食券がないと食べれなかったわけではない。その券があると十円安かった。烏丸今出川の交差点近くに外食券食堂があり、専ら同志社の学生が利用していた。大学の近所、下宿の多い住宅地には、必ず外食券食堂があったものである。

三、四回生のころになると、裏寺町に十円ずしが軒を並べ、競争して皿を重ねたこともあったが、家庭で米を確保することはまだまだ大変な時代であった。

ナイロンの開発で、衣料品の統制が撤廃されたのは昭和二十六年である。衣料生活は目に見えて変わり、入学したころはかなり恵まれた状況になっていたが、男性は学生服が多く、角帽をかむっていた。角帽をかむること、皮かばんを持つことが誇りのようにも思われていた。いまから考えると、まだまだ彩りは乏しかったが、靴下だけは、赤や臙脂と華やかで、男性がいわゆる色ものを身につけた最初が靴下であったと思われる。

背広を最初に着たのは二回生の春だったが、三、四回生になると背広の仲間が増えてきた。トレンチコートも流行ったが、スーツもコートも紺色がほとんどだった。赤い靴下をはいても、赤や臙脂のベストを着るにはまだかなりの勇氣がいる時代だったのである。

しかし、衣料品の統制解除が、世の中を明るく賑わしていた。Hライン、Yラインといわれるファッションが町に華やきを与え、「君の名は」の人気とともに、真知子巻きが

話題となり、長いストロールが流行ったが、統制時代には考えられないことであつたろう。

入学した昭和二十八年からNHKがテレビ放送を開始したが、世の中はまだまだラジオ時代で、日本中をわかせた菊田一夫の「君の名は」も、ラジオドラマだった。

レコードもSPからLPへの転換期で、その音質のよさにびびくりさせられた。二回生のころだから、昭和二十九年の夏休みである。同志社のレコード音楽研究会が、そのLPを持って巡回し、母校である出雲高校でコンサートを開いたことがある。透き通るような音に、後輩達が感動していたことがつい先日のように思い出される。

街に音楽喫茶、名曲喫茶と称する喫茶店が出来はじめたのも、そのころである。レコードを愉しめる店は、古くから四条小橋の「フランソワ」、京大前の「らんぶる」、四条河原町の「築地」などがあつた。新しく丸善の横の通りに「るーちゑ」が登場し、クリスマスのころにはオールナイトでレコードを聴かせてくれたものである。

卒業後、いつのまにか千枚を超えるLPレコードがたまつたが、当時はとても手に負え

るものではなかつた。買えないから聴きにいふたのである。八十円に値上りしはじめたコーヒー一杯を飲み、二時間も三時間もねばつて、四、五曲を愉しんだ。いまでは、レコードだけが売りものでは、とても人は集められないだろう。生の演奏会はいつでも聴かれるし、LPあるいはテープ時代からCDなどさらに優れた音質の音楽が、家庭でふんだんに楽しめる時代でもあるからである。

当時、全盛だったのが映画である。思い出すままに列挙しても、凱旋門、風と共に去りぬ、第三の男、シェーン、終着駅、禁じられた遊び、ローマの休日、慕情、エデンの東、理由なき反抗、雨の朝パリに死す、旅情、裏窓、ピクニック、地上より永遠に、麗しのサブリナ、追想、王様と私、二十四の瞳、七人の侍、雨月物語、ビルマの竖琴、米など之際がない。多いときには月に二、三本は観た。そのころ観客動員は十一億人を超えているが、いまでは一億五千万人を割つたという。卒業して間もないころ創設された読売テレビに、読売新聞から転職した友人と、テレビ・映画論争をしたことがある。映画がテレビに喰われることなど、考えも及ばなかつた。

映画を観たのは、大方の場合現文学部教授笠井昌昭氏と一緒にである。テレビはまだ家庭に程遠いもので、学生がラジオを持っていても珍しかった。音楽喫茶が看板になつたごとく、テレビがあることが食堂やレストランの客寄せになる時代だった。昭和三十四年の皇太子御成婚、昭和三十九年の東京オリンピックがテレビのカラー化と普及を促進したのだが、当時は、映画のまさに「ゴールデン・エピソード」であつたのである。

後輩の江畑武、石丸（旧姓安念）正運、神原邦男氏もよく映画を観た仲間である。ブリジッド・バルドーがいい、イングリッド・バーグマンがいいではなく、どの映画の、何役を演じたバルドーがいい、バーグマンがいいということでないと話しにならないなどと、口角にあわを飛ばして映画を語り、ひいきの俳優を語つてもいた。京都の街に、「裏窓」や「再会」という、映画のタイトルを使った喫茶店が出来たのもそのころである。

京都に出て、いちはやく馴染みとなつたのが、河原町三条の「六曜社」であつた。学校に行かない日があつても、六曜社に顔を出さない日がなかつた。いまでも、京都に行くこと

必ず寄るが、マスターもママも昔と変わらず、とたんに三十年前にもどった気分になる。

この店に、笠井氏や仲間を誘い込んだのは私であったが、やがて結成した文化史研究会のタマリ場ともなり、出かけるといつても誰かがいた。ときには十数人がおしかけ、席の半分近くを占拠し、二時間も三時間もダベったものである。当時講師に就任されたばかりの小川光暘現教授は、私達にとって兄貴のような存在だったから、先生の研究室もかつこうのタマリ場としていたが、六曜社は、いわば第二研究室であった。

当時、学食の素うどんが十二円、きつねうどんが十五円であったから、六十円のコーヒーは決して安いものではなかった。本代が足りないといふと、こっそりお袋に支援を頼んだのは、本当は毎日のコーヒード代だったのだ。しかし、毎日、そこで議論したことは、書物にかえがたいものを残してくれている。

卒論を書くとき、その方法論のよりどころの一つとしたヴェルフリンの様式概念は、ここ六曜社のおしゃべりから学んだものである。文化史は、雑学こそ学の基盤をなすと、あらゆることを話題にし、議論した。同期の

達日出典、遠山泰之氏なども、そのレギュラーメンバーだった。そうした議論、おしゃべりの場合は、学生時代の私に、非常に大きな影響を与えた場である。千円を超す本を買おうと、当分朝めしぬきだなどいいながらも、コーヒーを飲まない日がなかった。

六曜社生れともいえる文化史研究会が、共同研究テーマとして選んだものに京都庭園史の研究があった。その研究資料として、庭園の写真をかなりとった。そのころ出たヤシカの二眼レフ、三五ミリカメラのトプコンが、私達の愛機である。そんなカメラで写した資料がいつのまにか相当な数となり、同志社イブに合せ、京都庭園史展を開催したのは昭和三十年である。

来場の方々に、みんなで説明したが、説明することによって、庭園の様式とその史的展開を学んでもいた。おりから庭園ブームでもあり、その企画は好評だった。それに力を得、当時の山陰日日新聞社、島根新聞社の協力を取りつけ、米子と出雲で京都庭園史展を開催したことがある。会期中、米子東高校と出雲高校で、日本彫刻史の講演会も行った。降りしきる雪の町に、同志社の校旗を立て、母校

の講堂に校旗を飾って講演した若い時代がなつかしい。出雲で泊った植木屋旅館に、名物割子そばをどっさり届けてくれた出雲の伯父も、一昨年は、帰らぬ人になった。

この研究が縁で、大徳寺大仙院とは格別の関係が出来、爾来親しくしていただいている。ウエスリアン大学で一年を過して帰国した笠井氏が、昨夏、お嬢さんといれだち、久しぶりに訪ねた大仙院で、閑栖南岳老師、住職宗園和尚に会ったことをわざわざ知らせてくれたのは、そうした縁があったからである。

研究会では、「文化史研究」という研究誌を刊行していた。卒業直後に、京都庭園史研究のまとめとして、「室町庭園様式史考序」という論文を書いたことがある。学生だけで刊行する研究誌として注目されていたが、やはり負担も大きく、それが最終号になってしまった。

庭園特集号としたそれが、しばらく大仙院の受付に何冊か並べてあった。その光景が、いまでもありありと思い出せる。

だが、それも昔、むかしの話となった。

(昭和三十三年大学文学部卒業・郵政大学校教員、  
エッセイスト・筆名 神西雅美)

# 有終館失火事件の思い出

更井良夫

今から五十九年前、一九二八（昭和三）年十一月二十三日のことは忘れられぬ日です。

折柄御大典で現天皇の御即位式で御所にお泊りになっていたこの日の午前二時頃に予科教室のあった有終館の教授室から出火したので、私は当時大学予科二年生で西寮にいました。有終館が火事だと叩き起され、早速現場に駆けつけました。まだ建物の外には焰も煙も出ていませんでした。然し参集した学生寮生たちはバケツリレーで水を運び、同じ西寮の東館に寄宿していたラグビーの選手たちは半地下の武器庫中から、教練用の小銃を持ち出していましたが、気がつくると予科長だった速水藤助先生のお姿が見えない。早速お知らせしなければと私は寺町鞍馬口下ルのお宅に走りまわりました。当時は電話は普及していない

し。一般の家には電話がなかったのです。お宅の戸を叩いて急をお告げしたところ驚ろかれ、ネクタイをされる暇もなく、ご老体を走るようにして現場に急行されました。出火の原因は教授室の中央にあった木製の火鉢に内側にトタン板で囲み木炭で暖をとって居られ、長いこと炭火の熱が灰を通して底のトタンに達して、それが床の板に燃えついたのです。教室はダルマストープでしたのに何故、教授室が木炭火鉢、それも一メートル四方のものでした。

尚ほ忘れることの出来ぬことは予科生全員が天皇に対して不敬なこととして頭髪を丸坊主となり、石原体操教師に引率され御所の建礼門前に行き、最敬礼して不謹慎のお詫びしなすことです。立命館大学の学生は近衛隊と称

して維新時代の服装をして草鞋はきで太鼓を叩き乍ら天皇のお泊りの期間中御所の周囲を歩いてデモンストレーションしていましたのが何んとなく妙な対象として記憶しています。

一方大学、予科、高商、中学の全教職員、学生生徒一同は神学館前（現クラーク記念館）前に整列して、御所に向い、最敬礼して謹慎の意とお詫びの意を表したのです。同じように火災現場に馳せつけた上野謙吉氏（昭和四年大学卒でラグビー選手で、武器庫の小銃搬出につとめた。岡山県井原市高屋町七九二）と過日この日のことを話し合いました。彼に聞いて下されば、尚ほ詳細が判りました。何分にも今日と異り当時は皇室に対し不敬と称して狼狽した事情は現代の人には想像もつかなかったことです。殆んど建物の外には火焰も出ず、僅かに屋根瓦の間から煙が出た程度でした。何んであんなに恐懼おくたわずとお詫びしたのでしょいか苦い思い出です。

（昭和八年旧制大学文学部神学科卒業、社会福祉法人岡山博愛会理事、同志社校友会岡山支部長）